

## 口語の一敬語法に就いて

藤 枝 徳 三

口語敬語法の一である例へば「お勵みになる」と云ふ句を問題にして、この形態が何故に敬語として許容されるかに就いて私案を述べて見ようと思ふ。

先づ「お勵みになる」の「に」は品詞として獨立すべきものであるか否かと云ふ點を取り上げよう。従來からになるを下さる 遊ばすと共に動詞より轉化した助動詞とされてゐるが、木枝氏が高等國文法新講に於て云はれるが如く、お勵みにはなる、お勵みにもなる 等とにとなるとは助詞によつて分離される事がある例からすれば、になるを助動詞とする事は出來ぬから、なるを動詞と見なければならぬとされる考へ方が穩當であらう。

次にお勵み は品詞としては何であるかと云ふ問題が

起るがその決定は可成面倒ではあるが、先に結論を述べるとそれは動詞の連用形であると考へ度いのである。

この解決に最も簡明な態度を取つてゐるのは保科氏の日本口語法である。同書の見解を本とすれば「あの人は慢心をお起しになる」と云ふ場合の慢心と云ふ目的語を「お起し」が持つてゐることになり、随つて「お起し」は動詞でありお勵みも動詞と見るべき事になるのである。

敬語としての特種な形態

敬語としての形態の成立には(一)尊敬の接頭語(お・御)を附する場合(二)尊敬の助動詞を添へる場合。この二つの孰れかゞ備はらねばならぬ事は云ふまでもない。今問題にしてゐる敬語は(お・御)なる接頭語が附せられ

てゐる點は問題とするに足らぬ。然しこの形は尊敬の接頭語を削除すれば、この一連の言葉は敬語としての資格がなくなる。

而も他の敬語は助動詞の「下さい」「申します」「致します」が添へられた場合はさうではない。即ち尊敬の接頭語が除かれても必ずしも完全に敬語の意義を失ふと云ふ事はない。例へば「お勵み下さい」ならば「勵んで下さい」を直ぐ聯想する事が出来る。然るに今問題にしてゐる形態から接頭語を除去した形「あの人は勵みになる」では全く敬語としての資格を失ふと共に意味も把束出来なくなるのである。この事は接頭語とに云ふ助動詞となると云ふ動詞とが、密接な關係に立つ事を暗示するものである。又一方接頭語を除去すれば敬語としての形態が崩れるとすれば「になる」の連語は敬語を構成すべき積極的な語性と云ふものを持つてゐない事になる。換言すれば「になる」が消極的な敬語構成の一分分であるに過ぎないといふ事になる。これがこの構成のみが持つ敬語として

口語の一敬語法に就いて

特殊な形態であると云ふ所以である。而してその特殊な形態は新しいものであるが、かうした消極的な敬語法と云ふものは方言として許される形態である。一方助動詞に積極的な敬語形態を持つ語は文語としての脈を引くものであり、それだけに古い發生過程を持つてゐるものであると思はれる。事實「になる」と云ふ形よりも（お・御）を冠頭せしめても、せしめなくても敬語としての意義の崩壊を來さない敬語法の發達の方が先に考へられるのである。例へばなさと云ふ連語（助動詞とする從來の説に従ふ）が積極的な敬語性を持つてゐるが爲に、あの人はお勵みなさるとも、あの人は勵みなさるとも云へるといふ形がそれである。口語法別記にも引用してゐる如く、後撰集雜一「ならの葉のはもりの神のましけるをしらでぞをりしたよりなさるな」と早くもその例を見出し得るのである。

こゝで今問題の敬語法と關係があると思ふ言葉をこの敬語法と共に左に表Iに於てイ、ロ、ハ、ニ、ホ、への

六種類又表Ⅱに於ても同じく六種類掲げて、推論の便宜をはかる事とした。中心は表Ⅰのホ型であることは云ふ

までもない。(以後十二種類の語形を表Ⅰ或は表Ⅱのイ、ロ、ハ、…型と略稱することとする。)

表Ⅰ

ヘ		ホ		ニ	ハ	ロ	イ		主語 (句)
動作をする人		動作をする人		主語の動作	主語の動作	主語の動作	主語	水は	
接頭語		尊敬の接頭語		名	述	連	名	湯	副詞的修飾語
連用形		連用形		詞	體形	體形	詞		
ナサル		ナル		ニ	ニ	事ニ	ニ	に	述語
あの人は		あの人は		ナル	ナル	ナル	ナル	なる	
お		御		勵	勵	勵	湯		例
勵み		勵強		み	む	む			
		に		に	に	事に	に		
なさる		なる		なる	なる	なる	なる		

表 II

へ	ホ	ニ	ハ	ロ	イ		主語 (句)
動作をする人	動作をする人	主語の動作	主語の動作	主語の動作	主語	水は	
目的格	目的格	領格	目的格	目的格	領格	飲用の	
接頭語 尊敬の	接頭語 尊敬の	名詞	連體形	連體形	名詞	湯	副詞的修飾語
連用形	連用形						
	ニ	ニ	ニ	事ニ	ニ	に	述語
ナナル	ナル	ナル	ナル	ナル	ナル	なる	
あの人は	あの人は	褒められると云ふ事は	褒められると云ふ事は	褒められると云ふ事は	水は		例
慢心を	慢心を	慢心の	慢心を	慢心を	飲用の		
お起し	お起し	起り	起す	起す	湯		
	に	に	に	事に	に		
なさる	なる	なる	なる	なる	なる		

助詞の性質

先に敬語構成の一成分として助詞に尊敬の接頭語及

なると密接な關係に立つことを暗示せしめるものがある

と云つたがこの助詞の性質は如何なるものであるかを

口語の一敬語法に就いて

檢べる事によつて先づ關係の緒口をとかうと思ふ。それでイ型の例の助詞にの性質が最も根本的なものとして取扱ふべきと思ふのである。それには先づ山田博士の日本文法論(五六頁)に引證される助詞にの檢討から始めよう。それによると

「に」は變換性作用を現はす動詞に對してその變換せる資格を表はすに用ひらる

として

木石になる 花の梢も青葉になりぬ

と云ふ例が擧げられてゐる。

この「に」の用法は最も普遍的に用ひられてゐるものである。これが「お勵みになる」の「に」と如何なる關係にあるかを檢べて見ようとするのであるが、私の考へとしてかゝる一敬語法の現存の事實の中には今述べた「に」の性質の展開が豫想されるのではないかと云ふ結論に落付くのである。

#### 構成と語の承接

こゝで「に」の性質を明かにする前に擧手から進んでにを受けてゐる語の性質を檢べる事の方が近道ではないかと考へるのである。先に日本文法論に擧げた 花の梢も青葉になりぬ の青葉は名詞であることは論を俟たないが、若し前項の續きに於て日本文法が引用してゐる例によると 散り散りになる 別れ別れになると云ふ場合の 散り散り 別れ別れ は同文法論では動詞の連用形であると云ふのであるがさう考へてよいと思ふ。即ち「あの人は慢心をお起しになる」(表Ⅱ\*型)と云ふ場合に「慢心を」と云ふ目的語を取り得る事によつて「お起し」が動詞である事が分るであらう。その間に形容詞的修飾語を入れて「あの人は慢心のお起りになる」と云つては語の脈絡が崩れて意味が分らなくなつてしまふのである。所が敬語でない場合(表Ⅱニ型)の如く形容詞的修飾語を入れて差支へはないのであるから勵みは動詞の連用形の形であるにしても動詞とは異つた性質のものであることが窺はれる。意義の上からしても(ホ型)は敬語法で

あり他型は敬語法でないのであるから自ら異つたものがあるのは當然と云へるのであるが、その相異點をもつと深く考察する必要があるのではなからうか。それは何故であるかと云ふとにが承ける形は元は純然たる名詞であつたのであるからにが受ける形が名詞形から名詞的な動詞の連用形に發達して行つた形があつても、それは最後まで動詞的色彩を鮮明に出す事が出来ずに終つたものと認められる。にが承ける形が名詞的であると云ふ構成を持つ語が直接に私が今問題にしてゐる（ホ型）敬語に變遷し得るとは考へられない。事實ホ型の敬語法の發達は明治になつて而も東京と云ふ局所に起つた新しい語であるが爲に（ニ型）から（ホ型）への推移の間は時間的に長いものであるから、その間には何か橋渡しをするものがあると考へるのは當然である。

\*保科氏の日本口語法に東京語でナサルを連接して敬語を表す場合にニナルを連接する事が多いとあり又發生が江戸が東京になつてからであるとされてゐる。

そこでこの間の空間に渡りをつける語形があるかを調べ

口語の「敬語法に就いて

て見るとそれらしい型が見出されるのである。尤も（ニ型）より（ホ型）への變遷は丁度一語の變遷の如くその時期を明瞭に劃する事も出来ず、又それ等の中間的なものゝ存在を或る程度の確かさを以て推定はして見ても言語表現の記録を以て全部表はされると云ふ事もあり得ないのであるから、この場合も可成りの溝を飛び越えて（ニ型）（ホ型）兩型間の渡りを付けねばならぬ不手際は許され度い。然し幸に（ホ型）の發生が保科氏の云はれる如く新しいものであるから、現在話される語に對する意識を敷衍して行つてその語の構成以前は斯くあつたであらうと推定する事により一つの手掛りを見出す事が出来るのである。先づにと云ふ助詞が（イロハニ）各型の場合には主體と客體とを一致せしめてゐたが（ホ型）の場合になると主體の動作がその又動作と一致するやうになるので主體の動作は只觀念上のものになつてしまつてゐる。ホ型の場合なれば彼がする動作が「お勵み」と一致するのである。従つて矢張り格助詞には（ニ型）の場合と同じ意義

を持つてゐる事になるのであるが(ホ型)の場合のお勵みの形態は主語の動作が觀念上のものとなり失せた爲に起る形であつてこの一連の語を話す人自身の氣持から云へば飽くまでもあの人が勵むと云ふ意味をやつとつゝましやかに言ひ現はしたといふ感じを抱いて話すのではなからうか。即ち勵みと云ふ名詞は意義上から餘儀なく考へられる形であつてその形の持つニュアンスは勵むと云ふ動詞的なものである。事實(ホ型)を我々は(ロ型)に於て意義の上から甚だ近いものを見出すであらう。即ち(ロ型)に於て主語の動作は明確に勵むと云ふ動詞によつて主述の關係に立ち(ホ型)の持つ意味との接近をも見出すからである。この(ロ型)の發生はずつと新しいものであつて明治時代は勿論多くは用ひられてゐるが江戸時代ではその末期になつて漸く現はれて來る語形である。例へば 東條義門の著語辭林香記(京大國語學國文學研究室本)に

己ガ短綫ノ深井ニ至ラザルヲ察セズシテ云ハレタ様ナ事ニナ

ル也

尙亦若ハツカリトイフ事ニミテ思フトイフ處ヘツ、クト明日  
カテハ忘レテモ大事ハナイ今日一日ハ忘レナヨトイフ事ニナ  
ル

とあるのが見出される。かうした通俗的な語形は東京語と云ふ新しい型に屬する敬語(ホ型)に可成り與つて力があつた事は肯かれる事である。然しこの(ロ型)はそのまゝに敬語展開に力を與へてそれ自身は一般普遍性を持つ口語として別途の發達を成して行つたのである。かく考へると(ロ型)以前の形は如何なるものであつたかゞ知り度くなる。(ロ型)がずつと新しい發生であるから(ロ型)以前の基本的の型はロ型の發生に接近した時期まで用ひられてゐなければならぬ。この基本的の形と云ふのは私の管見では佛典の訓點或は佛典の抄物にのみ見られるので可成その語脈の範圍が狭く、隨つて私の立論に充分な根據を與へる事は許されないかも知れないが參考の爲にその語形を例出すると、既に平安朝初期の加點かと思はれる西大寺藏金光明最勝王經白點に

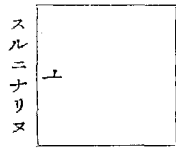
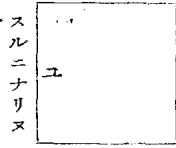
是の諸々の人王い若し能く至れる心を以て是の經を聽受せば  
則ち廣大希有の供養を以て我が釋迦牟尼應正等覺を供養する  
になりなむ

若し能く三世の諸佛を供養せむいは則ち無量の不可思議功德  
の業を得るになりなむ

とあるがこれは即ち(八聖)のものであつて後までもずつ  
とその構成は保たれてゐたと見え 東寺藏維摩經朱點  
(平安朝中期加點と推定する)にも

能く隨喜する人は則ち一切の智を取るになりなむ  
とあり

寶幢院點 延曆寺所用點 (眞俗二點集點譜所載) にも



と云ふ點の詞辭がある。

鎌倉時代になると尊號眞像銘文(一身田事修寺藏正嘉二年

口語の一敬語法に就いて

書)に

南无阿彌陀佛ヲトナフルハ・佛ヲホメタテマツルニ・ナルト  
ナリ

南无阿彌陀佛ヲ・トナフルハ・スナワチ・无始ヨリ・コノカ  
タ・罪業ヲ懺悔スルニ・ナルトマフス也・

名號ヲトナフルハスナワチ淨土ヲ莊嚴スルニナルトシルヘシ  
ナリ

南无阿彌陀佛ヲトナフルハスナワチ安樂淨土ニ往生セムトオ  
モフニナルナリ マタ一切衆生ニコノ功德ヲアタフルニナル  
トナリ

京大國語學國文學研究室架藏の釋迦如來念誦之次第に

眞言ヲ持誦シ慈心愍念ノ力ニ依ルガ故ニ即チ金剛ノ甲ヲ被ル  
ニナル

僅カニ三遍ヲ持誦スレハ即チ一切如來集會及無邊微塵ノ中ニ  
於テ無量ノ廣大供養ヲ兩ルニナル

とあり 千手觀音行法次第 (日本大藏經眞言宗事相章疏)  
由ニ印五處ニ成<sup>ル</sup>被<sup>ル</sup>ニ 金剛光焰堅固之甲冑

又京大印哲研究室架藏の 金剛界念誦次第私記にも矢張



り

成被<sub>レ</sub>金剛甲<sub>一</sub>

高山寺地藏院所藏の 金剛界念誦私記にも

即成衆  
被<sub>レ</sub>金剛甲<sub>一</sub>

とあつて、キルニナルと訓ましむべき朱の左註が施してある。又京大國語學國文學研究室架藏の語辭林香記に

こそトアレバシカトアリチガウタデアラウトイフニナルトチ  
ガヒケントナル也

ナレノ約メハネデヤ故一乗ヲス、メクトイフニ自然ノ淨土ニ  
イタルネトイフト同ジ事也トイフニナル也

又蒙求抄

今又主尊ノヒケウニナル

とあつて總てこれ等は後世ならば 連體形十事になる  
と云ふ場合と同じ意義を持つ特殊な構成である。この型  
即ち表I、IIの(ハ型)は(ロ型)より以前の發生であるか  
ら(ハ型)は決して(ロ型)の略されたものでない事が知れ  
よう。(ハ型)は主語を陳述する動詞がはつきり現はれて

ゐて而も文法上の制約から少しも逸れてゐない。今日我々の用ひ慣れてゐる使方即ち(ロ型)から見れば奇異に感ずるかも知れぬ。一方又少くともかうした意味を云ひ表はさねばならぬ際に(ハ型)の如き構成を用ひなければならなかつたのは(ロ型)が出來てゐなかつたからであると云へるのである。随つて(ハ型)が使用當時何等語形の上に破格と認むべき點がなかつたのであるから、(ロ型)の意味を表はす代用語として(ロ型)發生以前に使用されたからとて何等怪しむに足らない。然しこゝに注意せねばならぬのは、述語が明瞭に動詞の形を取つてゐる事である。かうした形は假令後で「事」と云ふ語が挿入されても飽くまで主語を動詞を以て陳述する構成をはつきり維持してゐるものであつて(イ型)の場合即ち名詞十の形よりも 動詞十に の(ホ型)の方により接近してゐる事が氣付かれるのである。先に(ホ型)の「お勵み」が動詞である事を暗示して置いたが、更に後で尙私の考へをもつと安定せしめる爲の補ひをする心算である。



右表の如く(イ型)が最も古い型である事は誰しも異存のない所であらう。然し(ニ型)は何時頃から出来たか調査不十分で明瞭な事が云へない。尤も太平記に「主上早や院の庄に入らせ給ひぬと申しける間力なく此より散り散りになりけるが」の如く連用形の繰返しの形があるがその方が先ではないかと思はれる。そして(ハ型)は(ニ型)の発生以前既に行はれてゐたと考へて差支へない様に思ふ。さてこの(ハ型)に於ては主語の動作を陳述する述語は動詞である。故に當然目的語を取り得るのである。例へば前記例出の 不可思議功德の聚を得るになりなむの如く聚と云ふ目的語を取つてゐるのである。凡そ目的語を取り得ると云ふ事はその構成が可成自由であり圓滑味があるものと云つてよいであらう。一方(ニ型)の場合の語の構成は(ハ型)に比して固苦しいものである。外に色々の理由もあるであらうが(ニ型)の発生が(ハ型)のそれよりも遅れた理由の一つとして語の構成と云ふ事を考慮に入れてもよいであらう。つまり動詞の連用形は名詞

として用ひ慣れてゐるが爲に(イ型)から聯想してすぐ出来さうな型であつたにしても、可成の暇のかかつたのは、矢張りそれが名詞として運用されるが爲に用ひられ難い不自由な感じを作り出したからであらう。兎角(ニ型)は(イ型)より導き出されたものでその關係は非常に密接なものである。而も(ニ型)はその型だけの發展性しかないのであつてこの型を直ぐ(ホ型)の場合に繋りを持つて行く事は出来ない。随つて私は問題の(ホ型)の場合の意義とその語の構成の説明は(ハ型)から(ロ型)へ進みつゝなされるべきが至當ではないかと思ふのである。

#### ホ型の意義

先づ助詞には如何なる性質を持つてゐるかを検討して見なくてはならぬ。これは既に木枝氏の高等國文法新講(二九〇頁)に平家物語の「行幸なる」を説明して

これは格助詞に動詞なるの附いて出来た連語である。文語の行幸ありのありが自然に存在してゐるやうに表記すると云ふと依つて敬語的の意を寓するが如く動作を直接にすると云

はないで自然になりゆくと云ふ言ひ方にして敬意を含めたものである。直接よりも間接の表現が敬意をより多く持つてゐる。

とされる如く になる と云ふ場合のみならず兎角間接的な表現が相手に對して遠慮した云ひ方であれば敬語的の意が寓せられる様になると思ふのである。この経緯を詳しく説明してゐるのに松下大三郎氏の標準日本語文法がある。それに依ると

(A) 町へ野菜を賣りに行く。

(B) 主人がお宅へお歸りになる。

と云ふ例を擧げてゐる。それに就いて私は次の如く考へてゐる。Aの場合の賣りは野菜と云ふ目的語を持つてゐるので動詞であるとする事が出来る。然し又必ずしも動詞とのみは限らず、かゝる場合名詞の構成も取り得るのである。例へば 町へ野菜の立賣りに行くとも云へるから 賣り には未だ名詞としての力も潜在してゐると思はねばならぬ。Aの場合には になる と云ふ(ホ型)で

口語の「敬語法に就いて

ない爲に(イ型)から(ニ型)の推移と同じ結果になつて名詞的な力が残されるわけである。随つてこれも お歸りになる と云ふ お歸り が動詞的なものとなる構成とは可成りかけ離れたものと見なければならぬ。A、B、間の二者の間には未だ構成上の大きな隔りがある様な氣がする。而してAの場合には(ニ型)に接近した構成である。即ち 賣り 勵み の性質が名詞に變化し易い形であり又全然名詞であると云ふ點に於て接近してゐるのである。さうすれば(ニ型)と(ホ型)との兩型の構成上の懸隔は助詞に承けて副詞的修飾語の格に立つべきものが一方は名詞であり他方は動詞であると云ふ相異點に歸着せしめてよいと思ふのである。随つてかゝる構成上の相異は又意義の上に相異を來す事になると思はれる。それで(ホ型)の場合に如何にして敬語としての雰圍氣を作り出すかを考へて見よう。

ホ型の敬語となるべき特質

あの人はお勵みになる と云ふ文をもつと直接に分り

易い語によつて連ねて見ると、あの人の動作が勵むと云ふ動作と同一である。と云ふ事を表現したものではなからうか。それ以外には語の説明が考へられない。問題は勵むと云ふ動作をあらはす語の形が連用形となつて——名詞ではない——更に接頭語おが添へられてゐる點にある。尤も「あの人の動作」に對應すべき語が(ロ)(ハ)(ニ)各型の如く表面に云ひ現はされてゐずして隠蔽されてゐるが爲に敬語法の資格を具へる様になつた事は云ふまでもない。それで「勵み」の上に必ず「お」を添へられると云ふ事は主語の動作を隠蔽しただけでは敬語としての資格に不十分であると云ふ事を現はしてゐるのであつて(ハ型)の如くなさる。と云ふ敬語によつて勵むの上に何等敬語を添へなくとも敬語としての資格を具へるやうになる事實とは對蹠的な立場になる。即ち他に十分な敬語資格を有する語が備つてゐなければ只單に主語の動作を隠蔽しただけでは不十分であることが分るであらう。それで(ホ型)の何處に敬語としての雰囲気を出すべき積

極的な要素が含まれてゐるか、と云ふ事である。こゝで考へられる事は、主語の動作と云ふ形は成程隠されてゐる様に見えるが、實は隠されたと云ふよりも主語の動作そのものをはつきりと陳述してゐると見た方がよいのではないか。あの人の動作即ちお勵みと云ふのではなくして勵むと云ふ動作をしてゐるのである。随つて何を勵んでゐるか、と云ふ目的語も亦豫想されて來るであらう。こゝに(ニ型)と(ホ型)との大きな相違がある。かうした目的語の豫想は、お勵み が動詞であることによるのである。がその動詞の性質は(ニ型)からは前述の如く出て來ないのである。どうしても(ロ型)の場合に於ける、勵む が動詞である場合の聯想をそのままにして(ホ型)が成立して行つたと見た方が穩當ではなからうか。さうした考方からすれば(ハ型)の場合が注目し値するものとなり、その場合の、勵むは純然たる動詞であつて目的語を取る場合もあれば敬語助動詞を添へて敬語となる場合もある。

前出の例

とあるによつて分るであらう。

かうした動詞を發足點として更に後に事と云ふ名詞が挿入され更に勵む事が お勵み となつたのは(ニ型)の構成の聯想と見られるのであつて而も(ニ型)と同一の職能を持つてゐない別の形を取つたものと考へられる。

然しこゝに 御奮勵になる と云ふ場合の御奮勵が私案の立前からすれば動詞にならねばならぬ事になるがそれは如何に説明すべきであらうか。木枝氏はかゝる場合名詞と見られるのであるが筆者が動詞と見る考方は奮勵をサ行變格活用動詞の語幹と見てその活用語尾が省略されたと見るより外はないのである。勿論音の消滅ではない。話才當事者がある集團語の慣習に制約されて自らは動詞的な氣持を以て話しながら、その語形が暗黙の中に名詞となつてゐたのではないかと思はれる。——その變化が語感の好惡によつて左右されたか發音器能の局所的慣習によつたのであるかは突き止め得ないが——その形

口語の一般語法に就いて

のみが名詞となつてはゐるが、語に含まれた感じ方はどうしても動詞である様に思はれる。御覽になる と同時に 御覽じになる と云へる事を見ても動詞らしいものを感じ得るのである。この様な考へ方は文法を形態に依つて處理しようとする便宜に反逆的な態度を取つた様な事になるが現代の口語を律するのにも局所的な方言の問題に當面する時、形態のみで律し切れぬものがある。今かうした形をサ行變格活用動詞の活用語尾の省略と見るのは文法の形態の整備を攪亂する何ものでもないが幸な事には現在我々が用ひてゐる口語である以上、我々の用ひ方が形態の問題以上の高い解決基準になつてよいであらう。一體サ行變格活用動詞となつて日本語化された漢語の部分は文法の形態から云へば語幹であるが、それが漢語の本來のはたらきをも加味せしめて語幹だけで動詞とも名詞とも兩様に聽き取られる話し方をする。「君は中々數學を御勉強ですね」の「御勉強」や、もつと甚しくなれば「君は今數學を御勉強」と云ふ疑問文に於ける「御

勉強」は孰れも名詞ではない。後者の場合は疑問を表記する助詞の無い代りにアクセントを以て代用するのが我々の用ひてゐる方法である。漢語が文法形態の無い代りに四聲に依つてその補ひをしてゐる事と對比せしめて見てもどうか。「勉強」は形態から云へば名詞である。然しアクセントによつてその意味(疑問か平叙か)を差別を付けてゐるのであるならば最早漢語の四聲と同じく形態に於ては名詞であらうとも、當事者の感じはそれを動詞として發語してゐると見なければならぬ。尤も(御)と云ふ尊敬の接頭語はそれを冠せられた語をして動詞的形態となる事を阻む力を持つてゐる事が見出されるであらう。然しかゝる傾向があるが爲に一概にそれが名詞になり切つたとは云ひ得ない。一面にかゝる傾向に引きづられたサ行變格活用動詞の活用語尾の省略に過ぎないとも考へられるであらう。然し省略の原因の闡明は前述の如く語感の好惡、集團の制約の複雑な交錯があつて不可能である。

(ホ型)の敬語構成が前述の如く主語の動作の隠没によつて消極的な敬語形態を具へると考へるのは勿論至當であらう。然し更に主語の動作は全然隠されてしまつたのではなく、連用形の形態を取つた所の一層印象的な動詞を以て現れて來てゐる點に注意すれば、その動詞こそ敬語構成の重要な役割をしてゐると考へるのも強ちに無理な見解ではなからう。即ち主語の動作を全然隠くしてしまはず、それかと云つて明瞭に言ひ表はし得ないのは相手たる主を敬ふ爲に躊躇せられるからである。隨つて從來の習慣によつた正しい構成を取るべき所を連用形とした所の文法の破格を以て濁すといふ手段を取つたと考へられるのである。然し相手の主を尊敬すればこそかゝる破格によつても意味を觀取して貰へると云ふ考へを相手は持つであらう。自ら破格の形態を持ち出して來る事それ自體が既に自卑の態度である。かうした漠然たる構成の中にも主語に對應する述語となるべき語の力

と云ふものを可成はつきりと表面に浮き出させてゐる。その述語たるべき部分が名詞であらうが動詞であらうが痛痒を感じない形態の漠然さといふものこそ、その語に集中される語感の強さといふ事を裏書してゐるのでなく、何であらう。名詞か動詞か孰れと辨へられ難い程、主語を尊敬するといふ雰圍氣を出す事に効果を擧げ得られるのではないか。それと同時にかうした破格の語法は可成聞手に強い印象を與へるであらう。一つの語をそれが構成してゐる句の中に於て明瞭に浮出させ、又一面にはその語が従來の文法の約束としては破格である形態を以て主語の動作の陳述に相應する部分を濁して、自ら尊敬の雰圍氣を出さしめるといふこの二つの點が（ホ型）の敬語としての資格に對する照準であり、又現代口語領域に普遍性を持つてゐる強みであらうと思ふのである。